

日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働運動

The Labour Year Book of Japan special ed.

第七編 国際労働運動

第四章 世界労働組合連盟の創立

第五節 第一回世界労働組合大会の諸決議

大会の諸決議

成立した世界労連の大会——第一回世界労働組合大会は、ロンドン会議の決議の実行にかんして世界労組会議運営委員会ならびに各国代表から聴取した報告と、会議中に提出された各国代表の緊急の報告ならびに提案にもとづいて、つぎにあげる決議を採択した。

「国際機関および組織において世界の労働者を代表することについて」と題する決議は、サンフランシスコ会議が世界の労組を討議に参加させなかったことに強く抗議するとともに、「国際安全保障組織、および平和と再建の問題について責任をもつすべての国際機関と団体とに代表を効果的に参加させること」を、あらためて要求し、連盟が世界の労働者を代表して国連に参加する権利をもっていることを宣言して、とくに経済社会理事会に顧問の資格で参加するよう全力をつくすことを、執行委員会に要請している。この決議はまたドイツにかんするポツダム協定、日本にかんするポツダム宣言を歓迎し、両国に民主的な政府をつくるための基礎は日独の「労働者のなかにのみみいだされる」とのべ、両国調査のための世界労連使節団を派遣すること、両国の占領機関に世界労連代表を顧問の資格でいれるよう要求すべきことを、きめている。

「ロンドン会議の決定を実践するにあたっての各国労働組合の活動報告についての決議」は、復員軍人の就職、生活、再訓練の問題、平時への移行にともなう失業の危険と社会保険の拡大の問題、ファシズムの残りかすをとりのぞき国際連帯と統一の精神を労働者にふきこむための、労働組合員の文化教育の問題、にとくにふれたのち、ロンドン会議で作成された労働組合の権利の基本憲章と緊急要求を実現するために全力をあげることを、加盟組織に要求している。

このほか「大会の全員会議によって検討され、執行局に提出された決議」が一三あった。その第一決議は、連合政府にスペイン・フランコ政権との外交関係を断つことを要請している。第二決議はアルゼンチン・ペロン政府との外交断絶を要求しており、第三決議は、イランとギリシャの労働組合代表の大会出席を妨害し弾圧したことについて、両国政府に抗議している。第四決議は「民族自決権」にかんするもので、植民地人民が「自決権や民族独立の権利を現在十分に実現することができないとしたら」、ファシズムに対する勝利は、「勝利といってもまったく不十分な勝利にすぎない」とのべ、インドシナとインドネシアの人民にたいして加えられた武力攻撃と労働組合にたいするギリシャその他の政府の干渉を非難して、執行委員会にギリシャ調査委員会をつくることを要請している。第五決議は、人種的差別と迫害の問題を取り上げており、アメリカ合衆国とラテン・アメリカ全体にひろがっている有色人種にたいする差別待遇、いくつかの国でおこなわれている、中国人、インド人、アラビア人にたいする移民制限などにふれ、こうした差別に反対してたたかうことを決定している。

第六決議は、ラテン・アメリカ労働総同盟の報告を審議した結果採択されたもので、後進国で民主

的管理のもとに工農業を発展させ、従属的地位から解放すること、そのさい民族的・社会的利益を害するような内外の独占的利潤追求に利用されないようにすること、また先進諸国の援助は、内政干渉や国際カルテルならびにトラストへの従属をひきおこすものであってはならないことをのべている。第七決議も同じ労働総同盟の提案にもとづくもので「国際独占やトラストが反動勢力の中核でファシズムの最も強力な支持者であることは疑いない」とし、これらのものが「労働者を犠牲にしておこなっている統制を打破するために」、「各国で効果的な措置をとる」ことを要請している。第八決議は、アジアにおける社会的諸条件を労働者階級にふさわしいものにする目的で、アジア労組会議を開くことをきめており、第九決議は、植民地、半植民地諸国の経済・政治状態を調査し、関係政府に勧告するための委員会の設置を、執行委員会に勧告している。

第一〇決議は、「恒久平和と繁栄を確保するために連合国の統一をつくりだした故フランクリン・D・ルーズヴェルト大統領」の偉業をたたえた追悼の決議であり、第一一決議は、多数の船員から大会によせられた電報にのべられている提案について、執行委員会に考慮をもとめた決議であった。

指導機関の選出

世界労連が一〇月三日に、正式に発足すると、一〇月四日大会は総評議会の選挙をおこない、五一カ国の組織から七一名の評議員を選出した。そして五日に第一回総評議会が開かれ書記長にルイ・サイヤンを選出するとともに、執行委員をも選出した。イギリスのシトリンは書記長に国際職業別書記局のスケヴネルスを希望し、「スケヴネルスが選出されなければ、イギリス労働組合会議は世界労連に残るかどうかを決定する権利を留保する」とまで強硬な態度をしめしたが、絶対多数の評議員に支持されず、要求を撤回した。

一〇月六日には第一回執行委員会が開かれ、ここで議長にサー・ウォルター・シトリン(英)、副議長にシドニー・ヒルマン(米)、V・V・クズネツォフ(ソ連)、レオン・ジュオー(仏)、ヴィンセント・ロンバルド・トレダーノ(ラテン・アメリカ)、朱学範(中国)、G・D・ヴィットリオ(伊)、F・クーベルス(蘭)が選ばれた。

一〇月六～九日にはさらに第一回執行局会議が開かれ、副書記長としてジョン・ブロフィー(米)、M・ファリーネ(ソ連)、ワルター・スケヴネルス(白)が選出された。

一〇月八日世界労働組合大会はすべての予定された議事を処理して、その歴史的な幕を閉じた。閉会にあたって副議長に就任したばかりのレオン・ジュオーがあいさつし、次のようにのべた。「今や世界労連は結成された。もしもわれわれがわれわれの使命を自覚するならば、未来はわれわれのものである。もしもわれわれが、われわれの理想であり同時に全人類の理想でもあるものに固く結びついているならば、未来はわれわれのものである。」

日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働運動

発行 1965年10月30日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 労働旬報社

2000年2月22日公開開始

